

# 夏の夜の夢

岡本かの子

青空文庫



月の出の間もない夜更けである。暗さが弛ゆるんで、また宵が来たやうなうら懐かしい気持ちをさせる。歳子は落付いてはゐられなたのい愉たのしい不安に誘はれて内玄関から外へ出た。

「また出かけるのかね、今夜も。——もう気持ちをうち切つたらどうだい。」

洋館の二階の書齋でまだ勉強してゐた兄が、歳子の足音を聞きつけて、さういつた。

窓硝子ガラスに映る電気スタンドの円いシェードが少しも動揺しないところを見ると、兄は口だけでさういつて腰を上げてまで止めに出ては来ないらしい。

「ええ、もう今夜たつた一晩だけ——ですから心配しないで、兄さんもご自分の勉強をなさつて……。」

歳子は自分の好奇心な行為だけを云はれるのに返事をすればたくさんなのに、兄の勉強のことにまで口走つてしまつたので、すこし云ひ過ぎたかと思つたのに、兄は「うむ、さうか」と温順おとなしく返事をしたので、却かえつて気が痛みかけた。

「兄さん、棕櫚しゆろの花が咲いてますのよ。葉の下の梢こずえに房のやうに沢山たくさん。あたし何だか、ぼち／＼冷たい小粒のものが顔に当るので雨かしらと思ひましたらね、花が零こぼれるのですわ。」

兄の気持ちを取とり做し気味に、歳子はあどけなくかう云つた。すると兄はすつかり気嫌よく、

「棕櫚の花が咲いたか。ぢや、下を見てご覧、粟あわを撒まいたやうに綺麗きれいに零れてゐるよ。」と云つた。

歳子は跼せぐくまつて、掌てのひらで地をそつと撫なでて見た。掌の柔い肉附きに、さら／＼とした砂のやうな花の粒が、一重に薄く触れた。それは爽さわやかな感触だが、まだ生の湿り気を持つて、情味もあつた。かの女は「闇あんちゆう中に金屑かなくずを踏む」といふ東洋の哲人の綺麗きれいな詩句を思ひ出し、秘密で高踏的な気持ちで、粒々の花の撒まきものを踏み越した。そして葉の緻密ちみつな紫のうぜんかずらのアーチを抜けた。歳子は今夜あたりの自分は、兄ともまた自分の婚約おつとの良人とも、まるで縁のない人間のやうに思へた。

歳子の兄の曾我弥一郎と、歳子の婚約者の静間勇吉とは橋きょうり梁ようと建築との専門の違いはあるが、同じ大学の工科の出身で、永らく歐洲に留学してゐた。文化人とは恐らくこの二壮年などはいふのであらう。彼等は近代の文化人とはあまりに知性が冴さえ返るその寂しさと、退屈をいつも事務か娯楽で紛らしてゐなければならぬといふことを十分承知して、そして實際それをやつてゐるほどの文化人だつた。

帰朝後はいよく交際を密接にした弥一郎と勇吉とは、寵ちようあ愛いしてゐるパイプ——ネクタイピン——卓上の一枝の花——を一方は割愛し、一方は愛用し始めるといつた無雑作むぞうさな調子で、兄

はその友人と自分の妹の婚約を取計とりはからつた。もつとも、二人の男同志の間には、歳子をよその人間には遣り度やたくない愛惜があつた。兄は折角素直に生ひ立つた妹の愛すべき性格を知らない他人に、猥りに逆撫みだでさせたくないといふ真意から、また勇吉は自分が自分とはまつたく性格の反対なこのナイーヴなロマン性の娘を兄に代つて護り育てられる資格と自信を持つたものだから歳子の授受の内容には極めて親切で緊密な了解が働いてゐた。

「あの子は近頃どうしてゐるかね」

「あの子かね。は、は、は、あの子は少し退屈してゐるやうだね。僕が少し詰めて工房へ入り切りだからね。」

何か弥一郎と勇吉が外の会合で顔を合はす場合には、こんな問

答が交された。歳子をあの子と呼ぶことに二人はおのゝの立場で、歳子を愛し理解する默契を示し合つてゐた。

「ぢや、僕の方へ少し寄越しとけ、僕はここ三週間ほど仕事の合間だから、相手になつてゐてやれる。」

こんなふうにして歳子は婚約中の良人の家と兄の家の間を愛撫され乍ら往復した。幸ひ兄はまだ独身だし、良人の家には叔母がゐるが、この中年寄は寄人の身分を自認して、何にも差出なかつた。

「一體こんな呑気なことであたしいのでせうか。」

歳子は飽満に気付いて、あるとき婚約中の良人に訊いた。すると良人は思慮深く考へてゐるが、すぐ明るく眉を開いていつた。



「といつて、なにも強<sup>し</sup>ひて苦勞を求めものも不自然ですよ。まあ、呑気にしてゐられるうちはしてゐるんですね。」

歳子は未来の良人の頭の良さを信賴すると共に、あまり抱擁力のある明哲なものに向つて、なぜかいくらか反感を持つた。

兄の家へ戻つてから間もない日のことである。歳子は兄と一緒に音楽会へ行つて歸りにベーカリーに寄つて、そこで喰べたアイスクリームのバニラの香気が強かつたためか、かの女は家へ歸つて床<sup>とこ</sup>についても眠られなかつた。腺<sup>せん</sup>病<sup>びょう</sup>質<sup>しつ</sup>のこどもだつた時分に、かういふ夜はよく乳母<sup>うば</sup>が寢間着の上に天鷲絨<sup>ビロード</sup>のマントを羽織<sup>は</sup>らせて木の茂みの多い近所の邸<sup>やしき</sup>町<sup>まち</sup>の細道を連れて歩いて呉<sup>く</sup>れた。天地の静寂は水のやうに少女を冷やした。するとかの女は踏

む足の下が臍おぼろになつてうとくとして来た。かの女の口が丸く自然に開いて小さい欠伸あくびが出た。目敏めざとく見付けた乳母は、「さあ、やつと宵の明星さまがお手を触れて下さいました」といつて、ふうはりかの女を抱き取つて家へ入り、深々と寢床に沈めて呉くれた。それを想ひ出したので、歳子はやはり寝間着の上へ兄が洋行土産やげに買つて来て呉れた編糸あみいとのシャールで肩を包んで外へ出て見た。今更死んだ乳母うばに伴つて連れて歩いて貰もらひ度たいといふやうな幼い憧憬あこがれの気持ちもなかつたが、さればといつて、兄や婚約中の良人おととにがつちり附添つて歩いて貰もらひ度たいと思ふ慾求も案外に薄かつた。二人の紳士は歳子の上に現はれる眠りのやうな生理的現象を生理的生活の必然的要求と受取つて、親切いたわに勞たわつては呉れよ

うが、それ以上の深いものを認めては呉れないだらう。それは極めて幼稚な考へ方にしろ、あの乳母のやうに人間の総てすべのものと、しんからの尊敬と神秘観を持つてかの女を扱つて呉れる素質は兄にも良人にも全然なかつた。たとへ愛の手は同じでも、あの乳母とは感觸の肌触りに違つたものがあつた。歳子は生れつきかういふことを感じ分けるに敏感な本能を持つた女だつた。

かういふ時にかの女は兄と良人と、そして自分との間柄を考へて、自分はある意味で非常に幸福な女であるかも知れないが、またかういふ自分の肝腎かんじんな気持ちを自分に一ばん近い人が了解しない以上、自分は却つて世の中かえで一ばん不幸な女であるかも知れないとも考へた。だが、このことは口でいつても判ることでは

なし、むしろ独りで夜の空気の中を彷徨ほうこうする方が焦燥しょうそうの感じを少くした。

歳子の兄の住む土地の一劃は、道路まで誰か個人の私有地になつてゐて、道の口々は柵門さくもんで防がれ、割合ひに用心堅固の場所だつた。女の真夜中の一人歩きもたいした心配はなかつた。かの女はそろ／＼出かかつた月の光を吸ひつゝ木の茂みから来る理智的な湿り気と、大地から蒸発する肉情的な蘊氣うんきの不思議な交錯の中に漂渺ひょうびょうとした気持ちになつて、いくつか生垣いけがきについて角を折れ曲つた。鋏はさみを入れず古い茨いばらの株を並木のやうに茫茫ぼうぼうと高く伸びるがまゝにした道の片側があつて、株と株の間は荒つぽく透けてゐた。何気なく通るかの女は、同じく何気なく垣の中から

すうつと出て来た青灰色のブルーズ着の一人の青年とぼつたり顔を見合して、思はず立たちどま停つた。山中で珍らしく人と人とが出であ遇つたときのやうな眼の離されないおそ惧ろしさと、同時に物なつかしい感情がかの女の胸を掠かすめた。月光に明めいりよう瞭に照された青年の顔は、端正な目鼻立ちにかすかな幽ゆうしゆう愁を帯びてゐた。青年はやゝ控へ目に声をかけた。

「いゝ夜ですね。曾我さんの妹さんでせう。中へ入りませんか。」  
歳子はさすがに狐疑こぎした。「これはどういふ青年なのであらう。兄がこの近所に学校の後輩の家があるといつたが、大方それだらうか。」

青年はすぐ「今夜、うちの庭はとてもしずですよ。」と云つた。

その声はあまりに世の中の普通の言葉に何のかゝはりも持たない、卒直で親しみのある声だった。歳子は青年の誘ふその声に自然するくくとして入つてみる方に気持ちを傾けてしまった。しかし表面静かに微笑して一応辞退した。

「有難う。でも——」

「懸念なさることありませんよ。」

「でも」

「あなたのお兄さんは僕を知つてられる筈はずですよ。兄さんは僕の学校の先輩です。」

歳子はやつぱりさうかと思つた。かの女はさう了解がつくと妙な遠慮はいらないと思つた。

青年は牧瀬と云つた。その夜から牧瀬の庭を知り、その池の周囲の饗宴きようえんを知つた。それは淡々とした味を持ちつゝ何となく気がかりの魅惑があつて、あとを引いた。

翌朝兄に話すと、兄は、

「牧瀬が帰朝してると聞いたが、やつぱりさうかい。うん、あの男は後輩の中でも天才的な特長があるらしいけど、多少変りものなのだ、根は君子くんしじん人だ。さうなあ、交際つて別に毒になるほどのこともないが、利益にもならんね。」

といふ観方で、強しひてかの女を阻はばみもしなかつた。

歳子は知らずく二十日ばかりの間に、間を置いて七八夜も牧瀬の庭に遊びに行つたが、もう婚約の良人おつとの家へ帰る期日も近づ

いたので、いよ／＼今夜もう一晩ぐらゐの交際だと思つて、茨の垣の門内に入つた。

「今夜あたりはあなたが来さうな晩だと思ひましたよ。月の出が最初お目にかゝつた晩と同じですからね。」

牧瀬は歳子を迎へるなり直ぐかう云つた。

周りは小さい丘や築山つぎやまの名残りをとゞめた高みになつてゐて、

相当な庭園だつた証拠には、楓かえでとか百日紅さるすべりとかいふ観賞樹の木

の太さに、庭師の躡しつけが残つた枝振りで察しられた。歳子の兄の

家の屋上庭園から春は雲のやうに眺められるその桜の木も、庭の

中にあつて近づいて見るとみな老樹だつた。中央の池泉は水が浅

くなり、渚なぎさは壊れて自然の浅茅生あさじうとなり、そこに河骨こうほねとか沢おもだ



瀉かとかいふ細身の沢の草花が混つてゐた。

石橋かかの架つてゐる中の島の枯松を越して、奥座敷こうこに電燈が煌々うとついてゐた。座敷の中には美術品らしいものが一ぱいに詰つてゐるのが見えた。だが最初の夜から歳子を一番驚かしたのは、一面ほうほう茫茫々と生えてゐる夏草だつた。野菊もあればほうきぐさ筍草ほしきぐさもあるが、兎とに角かく、庭全体を圧倒して草の海うなばら原なぎさの感じだつた。

なるべくクローヴァーの厚く生え重つた渚なぎさの水氣の切れた辺に席を取つて、牧瀬と歳子はもう二三十分も神経を解放し、たゞ黙つて夏の夜の醸かもす濃厚さわやで爽かさわやかで多少腕わんぱく白しろなところもある雰囲うら気に浸ひたつてゐた。蛙かえるが低く鳴いて、月は息を吐きかけた程の潤うるみを保持もつてゐた。

「あゝいゝ気持ち」

歳子は喰べても喰べてもうまくだけあつて、少しも腹に溜まらない飲食物に味あじわひ耽ふけるやうについさう云つた。

「まだ、少女のときのやうに眠くなりませんかね。」

牧瀬は横にしてゐた体を悠々と立て直しながら、いくらかか擲ち揄ちひ気味に訊きいた。七八夜の間まに歳子は今までの生涯の体験たいけんやら感想かんじょうやらを識しらず知らず彼かれに話わしてゐた。

「眠くなつちやゐられないほどいゝ気持ちよ。それとも眼が覚めてゐて眠つてゐると同じやうな気持ちなのかも知れない。」

「うまいこと云ふ」と眩くらきながら笑つて牧瀬は、すこし歳子に躡にじり寄り、籐とうで荒く編あんだ食物籠かごの中の食物と食器を搔かき廻ました。

「喉が渇きませんか。今夜はこれをあがつてご覧なさい。おいしいですよ。」

牧瀬は月にきら／＼光らせながら魔法罫びんからコップへ液汁をなみ／＼と注いだ。

歳子はそのコップを月にさしつけて、透すかしてゐると、牧瀬は「水晶石榴ぎんくろのシロップです。シロップでは上品な部ですね。」と云つた。

それから彼は不器用にパイヤを切つて小皿に載せ、レモンを絞つてかけてから、匙さじと一緒に差出した。藐姑射山はこやのやまに住むといふ神女しんによの飲みさうな冷たく幽邃ゆうすいな匂ひのするコップの液汁を飲み、情熱の甘さを植物性にしたやうな果肉を掬すくつて喰べてゐると、

歳子はこころがいよく／＼楽しくなつた。蚤のみの喰つたあとほどの人恋しさの物憎い痒かゆみが、ぼちりと心の面に浮いた。牧瀬のスポーツシヤツの体からは、半人半獣のやうな健やかな感触が夜気に伝つて来た。

森から射上げられるやうな鳥の影が見えて、「きやく／＼」といふ鳴声ふがした。梟ふくろうおとに脅かされた五位ごい鷺さぎだと牧瀬はいつた。歳子の襲はれさうになる恋愛れんあい的な気持きもちちを防ぐ本能ほんのうが、かの女おんなにぶる／＼と身み慄ふるひをさして、その気持きもちちを振り落さした。

東京の中にこんな山の窪地くぼちのやうに思はれるところがあるとは、歳子は牧瀬に誘はれて、この庭にわへ来るまで想像しても見なかつた。ここは三四代前からの牧瀬の邸やしきで、隣接する歳子の兄の家の敷地

も昔はこの邸内になつてゐた。昔この辺は全く江戸の田舎で、狐や狸が棲み、この池の排け口へは渋谷川から水鶏が上つた程だつた。

牧瀬はまるで他人ごとのやうに歳子にさういふ話をした。歳子は一体この青年が夜な夜な断片的に語る自分の経歴やら、生活やらがまるで他人ごとのやうに淡々と話されるだけ、却つて印象が明確なのに気付いて不思議に思つてゐた。

牧瀬の断片的の話を綜合してみるとかうであつた。彼は建築史の研究を近代からだん／＼原始へ遡つて行つた。建築を通して見た古い昔の民族の素朴な魂と単純な感情に、極めて雄渾で澆漑とした生命が溢れてゐるのに、彼は精神を虜にされてしまつ

た。しかし、歳子の觀察によると、彼は趣味の高さから来る近代文化に対する自虐的な反抗と、複雑濃厚なあらゆるものに飽き果て、素朴なものゝ愛に引き返した一種洗練された健気けなげにも寂しい個性が感じられた。いはゞ世紀末的な敗はいたい頽たいの底を潜つて、何か清新なものを掴つかまうと漁あさつてゐる、老おいと若さと矛盾むじゆんしてゐる人間に見えた。彼はまだ、その目的の精神的なものは掴つかまないにしろ、肉体の健康と情操の高さだけは感じられた。これは彼から取り除のけやうにも取り除けられない彼の二次的性格になつてゐた。

どういふわけか、今夜の彼からは淡々とした話振りの底に熱い情熱が問かん歇けつ的に迸ほとばしつて、動揺し勝ちの歳子をしばゝ動揺させた。そして彼は頻しきりに恋愛の話をしたがつた。昔語りでも嘘でも

ロマンスの性質を帯びれば、それがすべて現実<sup>に</sup>に思へるやうな水色の月が冴<sup>さ</sup>えた真夜中になりかけてゐた。彼は恋愛を愛するが、しかし情熱の表現の仕方については、かういふ風変りなことを云つた。

「——肉体も精神も感覚を通して溶け合つて、死のやうな強い力で恍惚<sup>こうこう</sup>の三昧<sup>さんまい</sup>に牽<sup>ひ</sup>き入れられるあの生物の習性に従ふ性の祭壇に上つて、まるく情慾の犠牲になることも悪くはありませんが——しかし、ちよつと気を外<sup>そ</sup>らしてみるときに、なんだか醜い努力のやうな気がします。しかも刹那<sup>せつな</sup>に人間の魂の無限性を消散してしまつて、生の余韻<sup>な</sup>を失くしてしまつたやうな惜しい気持ち<sup>が</sup>がしますね。

僕はそれよりも健康で精力に弾ち切れさうな肉体を二つ野の上に並べて、枝の鳥のやうに口笛を吹きかはすだけで、充分愛の世界に安住出来るほど徹底して理解し合つた男性と女性とでありたく思ふのです。」

微風が草の露を払ふ。気流の循環する加減か遠い百合の畑からの匂ひに混つて、燻臭いにほひがする。歳子が気にすると、それは近所の町の湯屋が夜陰に乗じて煙突の掃除をしてゐるのだと牧瀬はいつた。その埃の加減か、または夜気で冷えた加減か池の面には薄く銀灰色の靄が立て籠めて来て、この濃淡の渦巻は眺める人に幻を突きつけて、記憶に潜在するあらゆる情緒を語れ々と誘ふやうに見える。牧瀬はしばらくたゆたつてゐたが、靄の幻を



見詰めながらたうとう語つた。

「むかしの牧神と仙女はそんな無駄なあがきを彼等の間柄の仲では一切しませんでした。彼等は愛があるうちは愛の完全透徹した力を信じてゐた。二人は子供のやうに遊び狂ひながら絶対に心は恋愛に充みたされてゐた。随分性質の悪い悪いた戯ずらをし合つて怒つたり、苛いめたりし合つても、愛の揺ぎを感じなかつた。星の摂理を信じ、互ひの性質の自然を尊敬し合つてゐるものには、疑ひだの不平といふものを挟む必要がなかつた。さういふものを挟む必要が来た時は、もうその星の司つかる運命は終つたので、彼等は次の星の運命の支配の下に引取られてゐるのだつた。そこでまた彼等は彼等の生命を一ぱいに張り切つた次の生活が始められる。

僅か七八夜の僅かな話のうちには僕は判りました。あなたは愛だわずの好意だのに対して素直で無条件に受容れられさうな理想家風の女性らしいですね。僕の直観に従へば、あなたは僕の考へてゐる恋愛論に共鳴が出来る方らしいですね。

この夏の七八夜あなたとここで話したメモリーは僕の一生のうちの最も好いメモリーになりさうです。こんなこと云つて失礼だつたら許して下さい。あなたは静間君と結婚なさつても僕はあなたの特異性を貰もらつたやうな気がします」

「私の特異性つてもものがございませうか。」

「あなたの特異性を強調していふなら、あなたは純潔な処女のまゝ受胎せよといったら、その気になる方らしいですか……はははは

は……。」

「……………」

突然牧瀬はつか／＼立つて行つて、今までの話題かかわらにひざまず関せぬやうな、またその続きのやうにも、池の渚なぎさに祈る人のやうにひざまず跪いた。そして歳子をも促してさうさせた。澄む水に二人の顔が写つた。暁あかつきまへの水の面は磨きたての銅鏡のやうにこつくりよど澱んで照度に厚味があつた。

いつの時代、どこの人間とも判らない若い男女の顔が水底から浮び出た。

しばらく見詰めてゐた牧瀬は云つた。

「やつぱり人間の男と女だ、はははは。」

歳子は襟えりもと元へ急に何かのけはひが忍び寄るものゝやうに感じたが、牧瀬に対してまた周囲の情勢に対して何の不安も湧わかなかつた。

それよりもむしろ自分の一生のうち二度と来ない夢の世界の恍こ惚うこつに浸ひたつてゐるやうな渺びようぼう茫とした気持ちだつた。

近くの森から飛び立つた小鳥が池の面を掠かすめて飛ぶと二人は同時に顔をあげた。

月は西に白けて、大空は黎明れいめいの気を見せて来た。そこに天地が口を開けたやうな一種いふべからざる神巖と空虚の面貌めんぼうの寸時がある。

歳子は殆ど一晩語りに語り続けた青年の矛盾むじゆんしてゐるやうな、

独断のやうな言葉を聞き明したが、決して退屈しなかつた。そして高踏極まる話をする青年の言葉の底に却つて切ない人間の至情を感じて、何か歎かずにはゐられない気持ちになつた。歳子は哀れな優しい溜息ためいきをした。

「たうとうあなたに溜息をさせてしまひましたね。それは僕ばかりのせゐぢやないのです。月のせゐでもあり、夏の夜のせゐでもありますよ。夜気に湿つた草の匂ひのせゐでもありますよ。でもよく幾夜も僕の夢遊病症につき合つて下さいましたね。これが最後の夜と思へばお名残り惜しいけれど、もう夜もぢきあけません。僕たちはもうお別れしなくちや……。平凡で常識な昼日中がやつて来ます。僕たちが折角せっかく夜中よるじゆうかかつて摘み蒐あつめた抒情の匂

ひも高踏の花も散らされて仕舞しまひます。」

そして彼はさう云つたあとにはむつつりと無言で、丈たけの高い庭草を分けてのしくと歩き出した。

結婚の前夜、歳子は良人おととに牧瀬の庭の夏の夜を話した。すると良人は例の思慮深さうに一考した後、眉まゆを開いて云つた。

「美しい経験だ。『夏の夜の夢』と題して、あなたのメモリーに蔵しまつて置くといふですね。そしてあなたのところが結婚生活の常じょう套ようとうに退屈したとき、とき／＼思ひ出してロマンチックなそ

のメモリーを反芻はんすうしなさい。僕もとき／＼分けて貰もらふ。」

歳子はこの時から良人の頭脳の明哲を愛しかけて来た。

間もなく歳子は牧瀬が中央<sup>ア</sup>亜細<sup>ア</sup>亞<sup>ア</sup>へ、決死的な古代建築の遺蹟<sup>いせき</sup>の発掘に出発したといふ消息を兄から聞いた。





## 青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成10 岡本かの子」国書刊行会

1992（平成4）年1月23日初版第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第三卷 小説」冬樹社

1974（昭和49）年4月30日

初出：「文芸」

1937（昭和12）年7月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：湯地光弘

2005年2月22日作成

2016年1月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 夏の夜の夢

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>